

露天型と

フェスティバルホール型

異質なりたぐえの異質な理由^{わけ}

一口に「人」といっても様々な性質を持つてゐるものの集合名称で、時に依り、場合によつて、正義派だとか、胆汁質であるとか、沈黙思考型であるとかの類別がなされることがある。そして、大方の場合に類型別がなされば、そのグループ間では他のグループを異質なものとみなして、相互の交流はほとんどなくなる。だから、たんなるレッテル貼りにすぎないような類型別けはなるべくしたくないのだが、ある一文を読んで、ハッ、こついつときには便利なんだなと気付かされた。その文とは、アレイがイドジャーナル、十月号にある。

今年の夏祭りにフォークシンガーなる人達が来て歌つて帰ったのはまだ記憶に新しいが、

酔ったオッサンがステージへフラフラと何層も登ろうとする。それを制止する主催者がソデに陣どっている。リズムにあわせて踊りながら、友部のまわりをウロウロしたりする者もいて、ビールを飲ませられたり、その光景はよそでのコンサートでは見られないものだろう。

確かに、途中で主催者なるものが訴えたように、演歌や歌謡曲は、そこいらの飲み屋なんかでいつでも聞けるやんか。それけど、今若いものに人気のあるフォークウっちゅもんを一度聞いてみようやないか。もうちょっと静かに聞いたってくれや……という要望は歌い手にとっては当然のものとしてあっただろう。

だが、あの日の騒動は、漠然と、或る場所にか何か起こることを期待して人々が集まっていた、というものではなく、毎年ある盆休みのヒマツアソとして繁りを集むみに集まって来た労働者達で、自らが参加、行動する意志を持ってゐる者も多い。彼らは決して、教養

その時の様子を紹介してゐる。釜ヶ崎の空にちよつと異質なりたぐえか」というのがそれだ、書き手の戸部信吉さんはその時に来た「フォークシンガー」へ友部正人さんと田中研二さんの仲間があのファンらしく、その中身は二人のフォークシンガを理解しない釜の人達に對するウラミ・ツラミを一杯。

釜の人間は程度が悪い、オレラのフォークがめかれへんのやから」と真、直ぐに言うのなら、せつかく来はったのに気の毒なことしたな、という気にもなるのだが、なにやら理解ありげに、釜の名所の説明やら繁りの風景の描写などを細かくおこない、自分の立場によつてのみ位置付け、自らが冒頭で歌い手に即して提起した問題の答をだそうとせず、末尾を「まだまだ考えることがありそうなる予感がつきまとして離れない。次の機会に……」なんて優等生的な形で締めくくる夜郎自大な書き方は、ひたすらにあの時の三角公園の騒動を侮辱するだけのもので、読み味の悪いことこの上ない。

を高めるために集ったのではなく、集りおたぬに集ったのだ。フェスティバルホールで第1次交歓曲を聴いて教養を高めようという人達と、同じ様な歌き方を求めるのは、集つてゐる目的が違つただけに無理といつものだ。

もっとも、教養を高めるためにフォークを聞いてくれ、とは戸部さんそ歌つた人達も思つてなく、聞きなれないものでもじっくり聞く姿勢をもう少し持つてくれれば、ということなのだろうが、じっくり聞くよりも、舞台へ上つて提手を握めたり、踊ったりすること最大の歓迎の表現であり、一人だけ加ひいれ気持ちは歌い、おとは聞いただけということをおしとこない釜ヶ崎では、そういう相互理解の仕方はふり立ちにくい。

コンサートのあと、のど自慢大会が始まるヤッあつという間に、ステージは数十人の、めうんぐで一杯になり、三角公園の中はコンサートの際のだらけた雰囲気からがうつり替り活気が満ちた。その歌う人達は決して上手ではなかったが、一人のスターが舞臺を

占めていた時よりも、聴衆が聞く姿を見せたことだけは確かだ。

戸部さんは、友部も研二も自分の持味を出していたりという、そして、通常のコンサートからは程遠いものではあったが、音楽が気になることなんか通うことで、友部と研二のうたに聞き入っている自分を見つけたような気がしたという。

その間に、野次はとぶのだが真剣ではなく、冷やかしの半分のグダグダ野次。中でも友部に向かって、「英語のうたなんかやめえ」と言ったのには思わず笑ってしまった。が、彼らにしてみれば友部のうたが異邦のうたにでもきこえたのだろう。「演歌をやれ」という声も多く、田中研二は唯一知っている曲「かごのとり」を唄った。いや唄わされたのかもしれない。ということもあったのだが……。

聞きなれないから「英語のうた」と野次ったのではなく、歌い方が、発音が、英語式で、あとで歌詞を読まなければ、その場で聞いただけではその言葉がつかめないから「英語の

うた」と野次ったのであり、レコードで二度ニ度と聞かなければ馴染めないものだったから異邦のうたにきこえたのではなかったか。

フォークシンガーなる人達は、決して刑務所慰問団のようなつもりで釜ヶ崎夏祭りに来られたわけではなからうが、自分達の歌が、釜ヶ崎の空にちよっと異質なものとして響きくであらうことを知りつつやって来たとするれば、あのゴリ押しのステージはあまりにも傲慢すぎなかったか。

山谷ブルースはフォークが演歌知らぬ、釜ヶ崎人情はフォークが演歌知らぬ、ただ青空の下で力仕事をすることの多い露天型人間は、それなりの感性をもつて自分の生活を彩る。

音楽やらバランスを気にして、フォークが演歌かにこだわり、聴衆の姿勢を問うフェスティバルホール型人間も、それなりに自己の生活の彩りをするがいい。

相互不可侵で行こうや。友部や田中研二の歌の中にピッタリするものがあれば密輸入させてもらうさかいだ。